



住職 堤 俊翁

あと、半年で20世紀も終わります。

ここにきて、いままでとは違う、なにかがかわるのではないか？そんな漠然とした予感があります。日本という国はいったいどんな国だったのか、明治になりわずか40年でロシアをやぶり、世界の列強と肩をならべた、と思いがって次の40年で国を滅ぼした。戦後の経済復興は奇跡ですがもっと考えることはなかったのか、人々はほんとうに幸せになったのだろうか？

これからは日本人の心の内側を見ていく時代となるのではないのでしょうか？心の底からの安心、心の底からの喜びを求めていくことが大切でしょう。

入山門 上求菩提 下化衆生
常に御佛様とともにありたいものです。

葬儀を考える

葬儀のこころ構えと流れ

臨終に立ち会う。人間の生命がこの世からあの世へと旅立つ瞬間を、自宅で見守ることが少なくなり、病院で亡くなる人が多くなりました。病院で亡くなるとすぐに葬儀屋さんが紹介され、その葬儀屋さんの手配にすべてを任せてしまう、というのが都市部では当たり前になってきています。ましてや核家族化が進むなかで、とても良きアドバイザーであるおじいさんや、おば

あさんと一緒に暮らしていない、また一緒に暮らしていても、そのおじいさんやおばあさんが、亡くなってしまうことがおおいわけです。ですから、こうした時こそ、遺族があわてず、菩提寺の住職とよく相談して、亡くなった方をお送りしたいものです。「畳の上で死にたい」と言いますが、家族にとっても、臨終を迎えつつある家族や親戚の面倒をみ、その臨終を見守ることは、その方のできる本当に最後のお世話になります。いったい、どのようなお世話が私たちにできるのでしょうか。安らかに生を終わらせる、このことを忘れずにすべきことを考えてみましょう。枕経とはこうした臨終を迎えつつある方の枕元であげるお経のことです。室内を清らかにし、また臨終の人の心が乱れることのないよう物音などにも気を配り、来迎仏やお名号の掛け軸や屏風を枕元に飾って行うお経です。ですが、なかなか臨終の瞬間にお坊さんに立ち会ってお経を唱えてもらうことが難しいこともあるでしょう。そんなときは、家族や親戚で南無阿弥陀仏とお念仏を称えてあげましょう。看取る人全員で低声で念仏を称え、来世に向かおうとする人に一度でもよいのですから、南無阿弥陀仏と称える力を出させてあげるようにできれば、それ以上の功德はないでしょう。そして、本当に臨終の瞬間が来そうな時には清らかな水を用意して、綿または筆で当人の唇を潤してあげます。いわゆる末期の水です。また病のせいなどで死苦にせまられている時などは当人の手をしっかり握り締め、阿弥陀さまのご加護

を祈りましょう。辛い病苦に迫られず、静かに臨終を迎えることができるならば、死期を悟った当人の最後の言葉を聞き漏らさないようにしたいものです。さらに、臨終の瞬間をとらえた善導大師の『発願文』を静かに朗読することも、当人のこころを落ち着かせるとともに、看取る側のこころも落ち着くことでしょう。

枕 経（まくらぎょう）

さて、枕経ですが、これは亡くなっていく人を仏弟子にして往生してもらうためのお経です。現状では、亡くなったあとお坊さんに読経してもらうことを意味するようになりました。カミソリで頭髪を剃り、仏、法、僧に帰依させるのです。そして同時にそのあかしとして戒名を授与してもらいます。

納 棺

お釈迦さまはその父の死に臨んで、ご遺体を丁寧に扱われました。香汁でお体を洗って、きれいな布に包んで棺に納めました。これが納棺をする前に湯灌をするしきたりのもとになっています。納棺にあたっては、たらいに水を入れ、そこにお湯を注ぎ、死者の体をきれいに拭きます。そして白い着物を着せ、経帷子『きょうかたびら』を左前に着せたり、手甲をつけ、わらじ、脚絆をはかせ、布帽という白いさらしを額のところで三角にして結びます。また六文銭などを入れた頭陀袋、杖などを一緒にお棺の中に入れます。数珠を手につけて胸の上で合掌させ、故人が生前に愛用していたものなどもいれます。ですが火葬のため不燃物は避けるようにします。最後に死化粧をします。地域にもよりますが、最近では葬儀社の人に納棺をまかせることが多くなりました。ですが、できれば大切な身内の体を遺族の手で清めてあげるようにしましょう。

通 夜（つや）

通夜の起源はお釈迦さまが入滅された時、その死を悲しむ弟子たちが、お釈迦さまを偲んでその教えを夜を通して語り合ったことに由来しています。まさに夜を通して、ただただ悲しむだけでなく、亡くなった人の思い出やその人に対する思い、その人から教わったこと、影響を受けたことなど、自分の人生の中でのいろいろな関わりを整理し、自分のこころの中にきざむため

の、大切な時間なのです。できれば灯明を絶やす事なく、朝まで家族、親族が亡骸のそばで見守ってあげたいものです。斎場などでは宿泊のできないところもあります、ですが可能なかぎり、夜通しそばにいてあげましょう。また、会葬に来ていただいた方との時間もできるだけ優先し、たとえ一言でもよいですから、お礼を言えるのが理想なお通夜といえるでしょう。さて、通夜での法要ですが、本来は故人を家族、親族など、身近な人たちの前で僧侶が故人のためにお経をあげ、冥福を祈るものです。ですから、家族、親族も僧侶と一緒にしてお経をあげたり、故人の冥福をともに願うのが自然の姿なのです。そして、故人を想う人が夜通し棺のそばにいて、思い出を静かに思い起こすための夜なのです。しかし、もちろん地域によりますが、最近では通夜に会葬者がたくさん見えることがおおくなり、喪主や家族、親族が僧侶の読経中にも会葬者への挨拶で忙しく、とても故人の冥福を一心に願う余裕さえなくなってきました。こうしたことは社会環境の変化や、人々の死者に対する意識の変化、通夜、葬儀式の儀礼化など、いろいろなことによるものですが、浄土宗の檀信徒でしたら本来の意味を忘れる事なく臨みたいものです。そのためにも常々から菩提寺の住職や寺庭婦人―お寺の奥さま―とのコミュニケーションをとりいざという時にあわてないようにしたいものです。

葬儀・告別式

葬儀も通夜の起源同様、お釈迦さまの両親が亡くなった時と、お釈迦さまが亡くなった時にさかのぼります。古代インドの理想的な王であった転輪王の葬儀がその原型となりますが、それは遺体を布や綿で体を巻き棺に入れ香木の上に載せ火葬にし、その後塔を立て供養するものです。こうした由来に基づき仏教各宗がそれぞれの宗義にあわせて葬儀を行ってきています。浄土宗では葬儀の法要は新亡―新たに亡なられた人―を極楽浄土に導くための下炬引導(あこいんどう)が中心になっています。下炬とは松明で火をつける火葬の事で、引導とは新亡を浄土に導くためのものです。ですからこの引導を渡す瞬間が葬儀式での最も大切な時です。この瞬間を遺族、親族で迎え、葬儀式が終わります。葬儀とはあくまで故人のためのものであることを忘れないでください。この引導を渡したあと焼香になります。区別するとしたらここからが告別式といえるでしょう。親族の焼香、ついで一般会葬者の焼香になります。会葬者の人数や葬儀礼によってはお経が始まるとともに焼香を始めることがありますが、浄

土宗の檀信徒ですから・僧侶が引導を渡す瞬間まではすくなくとも会葬者ではなく、法要に、すなわち祭壇の方に集中するようところがけましょう。告別式を終るといよいよ出棺となりますが、その前に会葬者へのお礼を喪主が述べる場合があります。喪主に代わって親戚の代表が述べることもあります。告別式が終わると故人を荼毘に付します。荼毘に付すとは火葬することです。そして火葬がおわって骨を拾うことを収骨といい、その勤めを灰葬といいます。

以上 浄土宗檀信徒宝典より

仏事のQ&A

ごじゅうそうでん 五重相伝

Q お寺などでよく耳にする「五重」という言葉の意味を教えてください。またこの時、戒名をいただけると聞きましたが、その理由を教えてください。

A 「五重」とは、正しくは「五重相伝」

のことをいい、浄土宗の奥義を五つの順序に従い、一定の日時と場所を定めて伝える伝法の儀式です。この五重には僧侶に授ける「五重伝法」と在家一般の方に授ける「化他五重」または「在家五重」とに分かれています。五重の期間中には、浄土宗の元祖法然上人の念仏の心を正しく受けとめ、念仏・礼拝など実践を通して信心を体得していただくものです。五重の起源は、浄土宗の七祖了誉聖阿『りょうよしょうげい』上人が弟子の八祖聖聰『しょうそう』上人に伝えたのが始まりです。在家の方への五重は、室町時代末期、徳川家康の祖先岡崎城主松平親忠公に、三河大樹寺勢誉愚底上人が化他五重を授けたのが最初といわれています。五重の内容については、五項目に分けたおのおのを、法然上人、二祖聖光上人、三祖良忠上人、中国曇鸞『どんらん』大師等の著書を参考にして、念仏の教えと行者の心のあり方を説いていく方式がとられています。この五重は浄土宗だけの特別な儀式です。信者の皆さんには、毎日が阿弥陀さまの光明に護られて生活ができるよう、また期間最終日には信者として最高の誉号(よごう)地域によっては禅定門・ぜんじょうもん禅定尼)が贈られますので、ぜひ受けておかれるようにおすすめいたします。戒名とは、三宝に帰依し授戒を受けた仏弟子の証として与えられる法名で、本来は生前

に授けられるものです。後には没後に授ける法名まで指すようになってしまいました。が、厳密には五重によって授けられる誉号とは、区別して考えなくてはなりません。世間では、長い戒名ほどよいと考えたり、院号をぜひとせがんだりする人もいますが、元来戒名は、例えば 院 居士のうち の二字だけを指し、他はその人の信仰度や社会的貢献度などに応じて付加される称号や尊称です。迷信や俗説などに迷わされず、正しい理解が大切です。生きているうちに戒名をいただいて、浄土宗の檀信徒としての誇りを持ち、明るく正しい清浄な手活を送っていただきたいと思います。

浄土宗なんでも相談室より

え！これが仏教語？

が き
餓 鬼

「あの子は餓鬼大将だ」「まだ餓鬼のくせして、生意気な奴だ」などと、もっぱらいたずら盛りの子どもたちをののしっている場合に、「餓鬼」を使う。しかし、元来「餓鬼」というのは、生前の罪のむくい、餓鬼道におちた亡者のことである。餓鬼道とは、仏教で説く六道(ろくどう)あるいは三悪道(さんあくどう)の一つで、ここにおちた者は、不浄のところにおり、常に、飢えと渇きに苦しむ。しきりに、水や食物を欲しがすが、腹ばかりふくれあがり、のどは針のように細く、物を飲み食いしようとするたびに、濃い血膿(ちうみ)や炎と化してのどに通らない。まことに悲惨きわまる、やせひからびた姿として描かれることが多い。これに無財餓鬼と有財餓鬼との別がある。前者は常に、物を欲しがする類であるが、後者はあり余るほど豊かな金品に恵まれながら、けちんぼで一層欲心をつのらせ、そのためにかえって苦しむ類である。前述のように、子どもを「餓鬼」と呼ぶのは、無財餓鬼の性格から来たものであろう。お寺で行われる法会(ほうえ)の一つに「施餓鬼会(せがきえ)」というのがあるが、これは、飢えに苦しむ生類や申う者もない死者の霊に、飲食物を施し供養くようするためのものである。